

ずいそう

ほぼ毎日の池田五月山

加藤 晃



最初の五月山とその後…

私の住んでいる大阪府池田市は2004年のNHK朝ドラ“てるてる家族”や昨年放送された“まんぷく”で有名になったが、五月山も日本で二番目に小さいという動物園があったり手軽にハイキングが楽しめたりして人気がある。その五月山にほぼ毎日午前中の日課として登るようになった。

ずうっと以前、今40代半ばを過ぎた息子達がまだ小学校に上がる前に市の広報誌で「五月山早朝登山の会」を知って、月二回日曜日の早朝に家族4人揃って登り始めた。息子達はそのメンバーの中の奇特なおじさんが時々隠してくれるお菓子を頂上近くにある公園の遊具や草むらの中から、探し出すのが楽しみだった。

そんな五月山登りも、その後は転勤で池田を離れ、再び戻ったり離れたりを何度も繰り返したので次第に足が遠のき、家からただ眺めるだけの山になってしまい、定年で池田に戻ってからも時々登っていただけだった。

それが6年位前の秋頃から健康作りのために再び登るようになった…それもかなり性根をいれて本格的に！

大文字の火床

五月山に登るコースは幾つもあるが、私は家から歩いて20分ほどの炭焼き小屋コースから登り始め、傾斜がやや急で階段状の段差も多い山道を30分ほどで大文字の火床がある大明ヶ原に到着する。

京都ほど有名でないが、五月山にも大文字焼きがあり、8月24日にはここ大明ヶ原に「大」、もう一カ所

に「大一」の赤々と燃える二つの文字が浮かび上がる。

ここは大阪空港を見下ろす絶好のロケーションでもあり休日は大きな望遠レンズのついたカメラで滑走路や離陸する飛行機を狙う人が大勢集まる。特に空港を見下ろして撮れるのは全国的にも珍しいらしく、時には管制官の無線交信を傍受しながらじっと目的の飛行機を待つ本格的マニアに出会ったりする（写真—1）。

この火床から急な草すべりの斜面を30mほど下ってペットボトルやコーヒー飲料などの空き缶、煙草の空箱などを拾うのが私の細やかな五月山へのボランティア活動である。始めた頃は随分と多くて小さなポリ袋が一杯になったが、最近はきれいな場所には捨て難いのだろうか、殆どゴミがなくて逆にガッカリするほどである。実はこの小笹の生えた斜面を下るのは、小さな土バツタが跳ねたり、生まれたばかりの赤ちゃんカマキリに出会ったりする楽しみもある。

木彫りのフクロウ

数年前、おそらく定年後であろう男性数人がいつも同じ広場に集まってワイワイ言いながらコーヒーを沸かしているのに出会った。その中で話に相槌を打ちながら黙々とノミを器用に動かして、落ちていた切り株等に彫刻をしていた人がいて、暫くして、登山道のあちこちに鳥や動物（中には犬のようなリスのようなものもあるが…）の彫刻が並ぶようになり、私達の気持ちをほのぼのとさせてくれた。その中でこのフクロウの彫り物は一等地にあって「君に会うと元気になる！」という表示とともに私達を励ましてくれている（写真—2）。



写真—1 大文字の火床から大阪空港を望む



写真—2

五月山の三角点

僅か標高 315 m の山なので、ほとんどの人は五月山に三角点があるとは思っていないのだが、実は頂上の霊園公園の北角から草が茂った細い道を 20 m ほど辿った場所に三角点の柱石が設置してある。

三角点の設置数は一等三角点が約 1,000、二等三角点が約 5,000、そして三等三角点は 30,000 点強らしいのだが、とにかくこんな低い山にも設置されている事には、沢山の高い山の三角点に親しんでいる私にとっては驚きであった。

また、五月山は千代山とも称されているようで国土地理院と記された白い木製の標識の根元には地元の人々が手作りしてくれた『千代山』の表示板がある(写真-3)。



写真-3

早朝登山の会

神戸の六甲山や大阪府最高峰の金剛山には毎日登山する会があるが、五月山も同様に公園の一角にある管理事務所の壁には会員の登山状況が毎日確認できる掲示板が設置されている。登山のたびに「出」を○で囲んだ出勤？ゴム印を押すことになっているのだが、これによると6月の時点で登録会員は36名、実はこれ以外に100回スタンプ帳があり、これを使って毎日登っている人達を加えると恐らく150人ほどが毎日のように五月山に登っているのだろう(写真-4)。



写真-4

私の登山回数は1,400回を超えているが、登録会員の中には比叡山の千日回峰行宜しく実に3年間無欠勤を記録した強者を筆頭に5,700回超え、5,300回超えの人がおり年齢も80歳超えが多くて、私などはまだまだヒヨッコなのだ。

日の丸展望台



写真-5

以前はてっぺんに鉄製の日の丸旗があった展望台だが今は錆び落ちて代わりに携帯電話のアンテナが設置されている。日の丸展望台からの展望は北側半分が北摂の山々に遮られるものの、天気の良い時には生駒山地の北端の交野山から、尾根道がいわゆるダイヤモンドトレールとして整備されている二神山、大和葛城山、金剛山を経て槇尾山に至り、泉南の山々、さらに紀淡海峡の友が島を経て淡路島、六甲山までの展望がぐるりと180度広がる(写真-5)。

もちろん梅田のビル群や天王寺にある地上300m、日本一の高さを誇るあべのハルカス、万博公園の太陽の塔、そして雨上がりの冬の朝など、条件が揃えば富田林にある高さ180mの白い大平和祈念塔(俗にPLの塔)も見られる。

また、展望台の下はちょっとした公園があり、遠足や課外授業かなんかで幼稚園児や低学年の生徒が赤い体操帽を被って走り回ったり、ビニールシートを広げて賑やかに弁当を食べているのに出くわすと思わず顔がほころんでくる。

子供たちは昼食もそこそこに、傾斜が緩すぎて“滑らない”コンクリート製のすべり台を歩いたり、お母さん達が心配そうに見守る中でカラフルなボルダリングブロックを頼りに緩やかな壁をよじ登ったりして実に活発だ。

杉が谷コースの下山

時間の余裕が無かったり気分が乗らない時には展望台からそのまま広い五月平高原コースで下るが、通常は変化に富んだ杉が谷コースを下山する。

尾根筋から少し下るとその季節になると双眼鏡と望

遠カメラと三脚の三点セットを抱えた人やグループの人達に会う。言うまでもないバードウォッチャーである。私などはウグイスやホトトギスの鳴き声しか判らないが、ピィピーィ、チイチイなどの鳴き声を聞き分けて丹念に高い梢の先や茂った大樹の中から目的の鳥を探し出す。時として狙った鳥がやってくるまでじっと待つ忍耐力も必要なので、私にはとても真似ができない。

今年は異常気象なのか雨が少ないので、例年は水が流れている小沢も枯れている。私はそんな沢に倒れた丸木を起こして、その上に石を2、3個ケルンのように積んで楽しんでいる（写真—6）。



写真—6

ずうっと以前に、疲れたのであろうか、お父さんに手を引かれた3、4歳の女の子がこれを見つけて「あっ、石が積んである！」と言いながら、それまでの足取りを忘れたように駆け上がってきた。時々、無残にも崩されたり、時として丸木ごと倒されたりするが、子供たちの発見や元気づけにと思って、性懲りもなく、また積み直す。

おわりに

五月山登山の楽しみ、それはなんとといっても登山道の途中で出会う蟻の行列の場所が去年と違っていることに気づいたり、年に一度あるかないかなのだが黄緑色に輝く天蚕の繭や文字通り玉虫色に輝く玉虫の死骸を見つけたりする発見。知らず知らずのうちにゆっくりと移ろう草花や木々の変化。それに名前は知らないけれどいつも会う人達との挨拶。失くした登山用ストックの代わりに桜の枯枝の杖を突きながらひたすら辿る坂道。それに逆説的ではあるが空っぽの頭の中で色々考える時間。夏前の今の時期は毎年出かける北海道の山々の登山を年齢相応に余裕をもって登るための10kg程の歩荷トレーニングの頑張り等など。

…それらの思いが入り混じる五月山登山をこれからも続けよう！ そう、当面2,000回登頂を目指して！